

## トラブル その二

松本康子

海外での子育てでは、日本の時とは異なる経験をします。その経験を通して、アメリカ文化や日米の違いなど、非常に多くのものを学びます。まさに、「子どもと共に、保護者も育つ」のです。その成長のプロセスを語っていただきます。

「アメリカの学校には、日本のような運動会・学芸会・修学旅行といった機会がないので、団体行動が子ども達の身に付かない」と思っている人がいるようだ。

団体行動が「同じ目標を持って一緒に行動する事」だとすれば、人数の多い少ないにかかわらず、アメリカの学校でも、グループの一員として行動するためのトレーニングは、毎日の学習の中に組み込まれている事を、長女が経験したトラブルを例に紹介してみたい。

長女が経験したトラブルとは、「グループ・ワークでつけられた私個人の成績に納得できない。」「グループの一員としてやることをやったのに、正当に評価されていない。」というものであった。

成績について先生に自分が直接聞いても回答が得られなかったため、私にその理由を聞いてほしいと持ちかけてきた。納得できない最大の理由は、「二人一組で割り当てられた作業を行なったのに、パートナーと私で成績が違う」ところらしい。

とりあえず、先生に長女の言い分を説明して事情を聞いてみた。「二人一組でやる作業を、彼女のパートナーの都合がつかず、彼女は一人でやってしまった部分がある」、また、「そのパートナーは、『自分は作業の一部に参加しなかった』と申告し、彼女はそれを申し出なかった」というのが、先生が長女に付けた成績の判断基準だった。その上で、先生は、「私の評価の仕方の問題はないし、生徒はグループの成績の

つけ方を承知しているはずだ」と、きっぱり言い切った。

それに対して長女は、『作業を完成させるため、パートナーができないことをカバーしあい、協力しあうのがグループ・ワークだ』と、小学校からずっと教えられてきた。その教えに従って割り当てられた作業を完成させた。」と主張した。

私にはそう言ったものの、結局、長女はその先生から納得できる公平な回答は得られないだろうと諦めた。

それまでの私は、子ども達の現地校での生活にあまり関心を持っていなかったのだが、グループ・ワークという、アメリカの現地校教育に興味を引かれた。その後、いろいろな機会を通じて、アメリカでのグループ・ワークが、どうも日本のそれとは違う事を、自分の子ども達からはもちろん、いろいろな子ども達から教えられる事になった。

我が家の子ども達に、グループ・ワークについて一般的なことを質問してみた。例えば、「グループ・ワークとは一体どのよ

うなものか」、また、長女の事で問題になった「成績はどのように付けられるのか」等だ。それに対する回答は、「グループといってもリーダーがいるわけではなく、個々で分担する作業もあれば、グループとして集まってする作業もある。また、課題提出日に間に合うように、いつ・どこで・どのように作業を進めるのかスケジュールを立て、作業完成まで皆で協力し合う」だった。一方、課題の内容についての勉強や情

